平成 29 年３月
新宿区立淀橋第四小学校
校長　　権田　伸子

平成 28 年度「新宿区学力定着度調査」における
本校の結果分析と今後の学習指導の取組について

１　平成 28 年度「新宿区学力定着度調査」について

○実施日　平成 29 年１月 12 日（木）　※予備日の設定あり
○対象　第２学年～第６学年の全児童（中学１・２年）
○内容　意識調査、国語、算数

２　結果の分析と今後の取組

（調：区学力調査からみえた成果や課題　学：普段の学習状況からみえた成果や課題）

	国語	算数
２年	調日記の指導や、時間内に文章を書く時間を設定するなどしてきたが、「書く能力」「書くこと」について全国の★平均値に届いていない。短文を書くことから始めて毎日積み重ねていく必要がある。 学毎日、漢字等の言語に関する宿題を出したことで、４月当初と比べて正しく文字を書く力が付いてきている。	調正しく計算をする等の基礎的な部分は区の★平均値に近づいているが、「数学的な考え方」「活用」の面で大きく区の平均値を下回っている。文章問題や発展問題の指導を丁寧に行う必要がある。 学毎日基礎的な問題を宿題にだしたり授業開始時に計算プリントに取り組ませたりしたことで、基礎が身に付いてきている。今後、その基礎力を活用していくため、単元の終わりに発展問題を扱って指導を行う。
３年	調日々のスピーチに関する指導の他に、全教科で話し合い活動を多く取り入れるようにしたことで、読む力が区の結果に近付いた。一方、日記指導を多く取り入れてきたが、書く能力は区の結果を下回っている。課題である、推敲の仕方を丁寧に指導し、段落の構成や誤字脱字を確認する習慣をつけさせる。 学ローマ字の読み書きが定着していないため、毎週金曜日の家庭学習にローマ字の課題を課し、反復練習をさせる。	調区の結果を下回った。特に図形の問題の正答率が低かったため、コンパスを活用して模様を描くことや、基本的な図形についての復習を行い、定着を図る。 学わり算の概念や、かけ算の筆算の仕方を忘れてしまう児童がいる。算数の時間の冒頭で行うタイムチャレンジに四則演算を取り入れることで、計算技能を伸ばす。
４年	調自力解決ができるよう文章の読み取り方や表現の仕方を指導したことで、昨年度同様、目標値を大きく上回ることができた。 学書くことに対して、まだ苦手意識がある。自分の書いたものを推敲するときのポイントを指導したり、児童がお互いの文章を読み合い、アドバイスする活動を行ったりするなどして、書くことに対する苦手意識を減らしていく。	調宿題での繰り返しの学習により、基本的な学力が身に付き、基礎の部分での全体正答率が昨年度を上回った。 学児童の考えを伝え合う活動を多く取り入れたことで、考えを深めることができ、学んだことを活用する力が高まった。また、児童が ICT 機器を使って発表したり、作業を見せたりする活動を取り入れたことで、視覚的にも理解を深めることができ、活用の部分での全体正答率が目標値を上回った。

5年	調関心・意欲・態度は、目標値より上回る結果となり、学習に対する前向きな姿勢がうかがえるようになった。特に話すこと・聞くことに★良い結果が出ている。年間を通し、スピーチを取り入れた成果が出たと言える。 学感じたことを言葉にするのが苦手な傾向がある。読書活動を含め語彙の幅を広げるとともに、根拠を基にした自分の考えを詳しく伝えるための活動を継続して行う必要がある。	調教科全体としては目標値を上回った。課題であった図形でも改善が見られた。毎時間ノートを確認し振り返りを徹底した成果と言える。しかし、合同な三角形を書く条件については★低い結果が出ているため復習の指導を行う。また、基礎的知識はあるがそれを活用する力が低い傾向がある。 学正答率の分布から、2 極化の傾向がみられる。少人数や個別指導などで個々に対応する指導の工夫が必要である。また、タイムチャレンジの伸びや授業中の発言など、できるようになったことを具体的に褒めることで、算数に対する関心を高めるようにする。
6年	調教科全体としては目標値を上回っているが、これまでも課題であった「書く能力」「書くこと」が他の領域より低くなっている。要点をまとめる活動、文章構成と論理的内容を考慮した長文作文の指導が今後も必要である。 学思いや考えを、高学年として豊かに表現する上でどのように言葉にすればよいのか分からずに形式通りの文章表現になってしまう児童が多い。幅広い分野における読書活動や熟語やことわざに触れ、それを活用するなどして、語彙や表現の基になるものを定着させ、文章を書く経験を積み重ねる必要がある。	調どの分野・単元でも正答率は全国平均と比較して大きな差は見られなかった。また、正答率の分布では、二極化の傾向が見られる。個別指導で基礎基本の定着を固めてく必要がある。 学自主的に学習に取り組む児童が増えている。一方、テスト直しの時間を設定しているが、基礎の定着が図れていない単元では、自力解決ができないため、結果として表れないことも少なくない。なぜ間違えたのかを今一度考えさせ、同じ問題を繰り返し解く学習を継続する必要がある。

３　結果のご家庭での活用について

本調査全体を教科毎にみていくと、国語では「聞く・話す」「書く」ことに対する苦手意識の存在が感じられます。相手の思いを理解しようとする意識、自分の思いを話すことや書くことで伝えようとする意識をもたせるようにし、教科横断的に指導をしていきます。

算数においては、引き続き基礎的な学力の定着を目指す必要があります。算数科全般の知識を確実に身につけさせ、それを結び付けて課題解決力を高めることを目指します。

学校でも、成果と課題を明らかにすることで授業改善に取り組んでいきます。同時に、お返しした個人票を、今後のご家庭学習の取り組み方について考えるきっかけとしていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。